

『今昔物語集』裡的犬的故事與中國文學

陳明姿*

摘要

早在中國周代，「犬」便被人類當成家畜來飼養。犬除了食用之外，亦具有逐盜、狩獵等用途。由於其與人類的日常生活有密切的關連。因此，自古便有很多與犬相關的文獻資料。至六朝時代，又從印度及西域傳入了不少的佛教故事，使得犬的故事更趨多樣性。而這些故事又在中日兩國頻繁的文化交流之下傳至日本。日本古代的文學裡也出現了不少與犬有關的故事。尤其是十二世紀前半，集天竺、震旦、本朝（日本）的佛教故事、世俗故事之大成的『今昔物語集』裡共收錄了十八則與犬有關的故事，當中有五則故事很明顯與中國古代的傳說、故事有關係。拙稿作為探討『今昔物語集』裡的異類與中國文學的關連及異同，特別聚焦於『今昔物語集』裡的犬說話，以探討其與中國文學之關連及異同。

關鍵詞：犬、佛教、道教、儒教、《今昔物語集》

* 台灣大學日本語文學系教授



臺灣大學學術
期刊資料庫

Canine Tales and Chinese Literature in Konjaku Monogatarishu

Chen, Mung-tzu^{*}

Abstract

Canine used to be domesticated as livestock in the Chou dynasty of China. In addition to its edibility, it used to expel bandits and hunt with mankind. Due to its close ties with human daily routines, ancient canine tales are often found in texts. In the Six-Dynasty (Wei-Chin South-North dynasty) period, a great number of Buddhist tales in India and Xi-yu the west states (consisting of foreign tribes) against the Central Plain entered China, rendering the diversity to canine tales that entered Japan later for frequent cultural exchanges between China and Japan at that time.

Actually, ancient literature in Japan used to cover dog-related tales. In particular, Konjaku Monogatarishuu in the late Heian Period the first half of the 12th century as the anthology of Buddhist and vulgar tales in India, China and Japan collects 18 canine tales where 5 tales are identified to correlate obviously with Chinese ancient legends and tales. The author explores the correlation between aliens in Konjaku Monogatarishuu and those in Chinese literature besides their similarities and dissimilarities with a focus on canine talks described in Konjaku Monogatarishuu in order to inquire the correlation with Chinese literature besides the similarities and dissimilarities concerned.

^{*} Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University



Keywords: Canine (Dog), Buddhism, Taoism, Confucianism, *Konjaku*
Monogatarishu



臺灣大學學術
期刊資料庫

『今昔物語集』における犬説話と古代中国文学

陳明姿*

要旨

犬は中国において古く周の時代からすでに家畜として飼われていた。犬は食用の他に、盗賊駆逐や狩猟などにも使われていた。人間の日常生活と深く関わっているため、古くから犬に関する文献も多く見られる。六朝の時代に入ると、インドや西域から様々な仏教説話が中国に伝入したため、犬の説話もいっそうバラエティーに富むようになった。そして、これらの説話はまた日中両国が頻繁に交流していたもとに日本に伝わった。日本古代の文学にも犬の説話が多く見られる。特に十二世紀前半に天竺、震旦、本朝の仏教説話、世俗説話を集大成した説話集『今昔物語集』には犬説話が十八もある。其中で中国文学と関連のあるものは五つ見られる。拙稿は『今昔物語集』における異類の説話と中国文学との関連及び異同を考察する一環として、『今昔物語集』における犬説話に焦点をあて、中国文学との関連及び異同を考察する試みのものである。

キーワード：犬、仏教、道教、儒教、『今昔物語集』

* 台湾大学日本語文学系教授



臺灣大學學術
期刊資料庫

『今昔物語集』における犬説話と古代中国文学

陳明姿

一、序

『周礼』に「犬人掌犬牲，凡祭祀共犬牲，用牲物」¹とあることから、「犬」は中国では古く周の時代からすでに家畜として飼われていたことが確認できる。犬は食用の他に「逐盗」²、狩獵³にも使われていた。人間の日常生活と深くかかわっているため、犬に関する古文献も多く見られるのである。六朝時代に入ると、インドや西域から様々な仏教説話が中国に伝入したため、中国の文学はあっという間にバラエティーに富むようになり、犬説話も多様になっていく。そして、それらの犬説話は日中両国の頻繁な交流を背景に、日本にも伝わることとなる。日本現存最古の文献『古事記・雄略記』の「布縵白犬著鈴而」⁴は、犬と関連のある文献が 712 年までに、すでに日本に伝来していたことの証である。又、日本最古の和歌集『万葉集』巻七には「垣越 犬召越 鳥獵為公 青山 葉茂山辺 馬安公」⁵ (No1289) という和歌がある。この和歌から奈良時代には犬が狩獵にも使われていたことがわかる。そして、十二世紀前半に天竺、震旦、本朝の仏教説話、世俗説話を集大成した説話集『今昔物語集』に収められている犬説話は凡そ十八である。一体、これらの犬説話は中国文学とどういふかかわりを持ち、且、どのような異同が見られるのか。小稿は『今昔物語集』における異類と中国文学との関連及び異同を考察する一環として、『今昔物語集』における犬説話に焦点を当て、中国文学との関連及び異同を考察する試みである。

¹ 漢鄭玄『周禮』卷九，四部叢刊明翻宋岳式本，中國古籍書庫 P192

² 注 1 同掲書 P91

³ 『説文解字』には、「狩，火田也，从犬守聲」、「獵，放獵，逐禽也，从犬獵聲」とある。即ち古代狩獵の時から、必ず犬を使うことが明らかである。(段玉裁『段氏説文解字注』宏業書局 1973 年 11 月 5 日初版) P316

⁴ 萩原浅男、江島巢隼雄『古事記 上代歌謡』(小学館 1990 年 9 月 1 日第 20 版)

⁵ 小島憲之、木下正俊、佐竹昭広校注・訳『万葉集』(三)(小学館 1972 年 5 月 31 日初版・1990 年 9 月 1 日第 21 版) P253

二、『今昔物語集』における犬説話と古代中国文学

『今昔物語集』にはチェックすべき犬説話が十八ある。即ち、巻三の二十「仏、頭陀給鸚鵡家行給語」、巻九の二十二「兗州都督遂安公、免死犬責語」、巻九の四十二「河南人婦、依姑令養蚯蚓羹得現報語」、巻十一の十一「慈覚大師、亘宋、伝頭密法帰来語」、巻十三の九「理満持経者、頭経験語」、巻十四の十六「元興寺蓮尊持法花経知前世報語」、巻十四の二十一「比叡山横川永慶聖人、誦法花経知前世語」、巻十九の三「内記慶滋保胤出家語」、巻十九の四十四「達智門棄子狗、蜜来令飲乳語」、巻二十の十六「豊前国膳広国、行冥途帰来語」、巻二十六の七「美作回神依獵師謀止生贅語」、巻二十六の八「飛弾国猿神止生贅」、巻二十六の二十「東小女与狗咋合互死語」、巻二十六の十一「参河国始犬頭系語」、巻二十八の二九「中納言紀長谷雄家頭狗語」、巻二十九の八「下野守為元家入強盜語」、巻二十九の三十二「陸奥国狗山狗咋殺大蛇語」、巻三十一の十五「北山狗人為妻語」である。そのうち、巻九の二十二「兗州都督遂安公、免死犬責語」と四十二の「河南人婦、依姑令養蚯蚓羹得現報語」は中国の説話を翻案した説話である。また、巻二十六の十一「参河国始犬頭系語」、巻二十九の三十二「陸奥国狗山狗咋殺大蛇語」、巻三十一の十五「北山狗人為妻語」には中国文学の影が色濃く落とされている。ここでは特にこの五つの説話に焦点を絞って、中国文学との関連と異同を考察することにしよう。

巻九の二十二「兗州都督遂安公、免死犬責語」の内容は凡そ次のようである。震旦兗州の都督遂安公が唐の王族ということで、王に封じられた。都督という官職をやめた後、田獵が好きなので、常に多くの鷹を飼っている。それがゆえに、常に犬を殺して鷹に食わせていた。そうしているうちに、安公が重病にかかった。安公はゆめうつつの状態で五匹の犬を見る。その犬達は彼の犬殺しを咎める。安公は最初は従者の過ちにしようとしたが、犬の方は、従者は彼の命令を従ったに過ぎないという。さらに「自分達は他の食を盗みも

しないで、ただ門の前を通っただけで殺された。よって必ず復讐する」と責める。安公は犬達のために追善供養をするから、命を許してほしいと頼み、その中の四匹の犬はそれに応じるが、白い犬はどうしても許さない。「自分達は罪無きにして殺された。その上、まだ死なないうちに、肉むらを切られた。その痛み、苦しみはとても言葉で言い表せない」といって、彼を責め続けた。

その時、ある人が現れて、「彼を殺しても、あなた達のためにならないから、むしろ命を許してあげて、追善供養してもらった方がよいのではないか」という。白い犬はこれを聞いて、安公を許すことにする。ただ、安公は蘇った後も体が自由にならない。犬達のために追善供養をしたが、病はついに治らなかったという。

この説話は『冥報記輯書』17をもとにして、翻案したものであるが、同話は『法苑珠林』の巻64、『太平広記』巻132にも収録されている。その内容は次のようである。

唐交州都督遂安公李壽，始以宗室封王，貞觀初，罷職歸京第。性好畋獵，常籠鷹數聯，殺他狗餵鷹；既而公疾，見五犬來責命，公謂之曰：「殺汝者，奴通達之過，非我罪也。」犬曰：「通達豈得自在耶？且我等，既不盜汝食，自於門首過，而枉殺我等，要當相報，終不休也。」公謝罪，請為追福，四犬許之，一白犬不許，曰：「我既無罪殺我，又未死間，汝以生割我肉，嚙嚙苦痛，吾思此毒，何有放汝耶？」俄見一人，為之請於犬者曰：「殺彼，於汝無益，放令為汝追福，不亦善乎！」犬乃許之。有頃，公甦，遂患邊偏風，肢體不遂；於是，為犬追福，而公疾，竟不差除。（延安公竇憚云：夫人之弟，為臨說之耳）⁶

『今昔物語集』巻九の二十二の内容と『冥報記輯書』17の「唐李壽」の内容とは大体同じであるが、細部はいささか異なっている。古代の文献書籍は全て手で書き写したものであるため、字が抜けたり、間違ったりする場合がしばしばある。例えば、原作『冥報記』

⁶ 唐臨著、佐々木憲徳輯、慧淨法師編『冥報記、冥報記輯書』（浄土宗文教基金会 2004年7月）P121

の方では「交州」とあるが、『今昔物語集』の方では「兗州」になっており、人名「李寿」は『今昔物語集』の方では「季寿」と間違っている。その上「季寿」のことを年号だと誤解して、「季寿の初」になっている。その他、言葉遣いも微妙に違っている。『冥報記』の方では、安公が「殺他狗餵鷹」（人の犬を殺して、鷹に食わせる）とあるが、『今昔物語集』の方では「常に犬ヲ殺シテ鷹二飼フヲ以テ役トス」⁷となっている。すなわち、「犬を殺して鷹に食わせるのをもっぱらとしていた」と、原作よりもその悪行が強調されているのである。又、犬が公を責める時の言葉が、『冥報記』の方では「且我等既不盜汝食，自於門首過，而枉殺我等」⁸とあるが、『今昔物語集』の方では「我等ハ他ノ食ヲ不盜ズ、只門ヨリ過ルヲ、枉ニ我等ヲ殺ス」⁹になっている。『今昔物語集』の方では、あなたの食だけではなく、他の人の食も盗まないというふうには、犬の無実がいつそう強調されているのである。犬は何も悪いことをしないにもかかわらず、一族は常に安公に殺される。犬の怒りに同調するよう読者を誘う語りである。『今昔物語集』の語りには犬達の怒りに合理性を与えようとする意図が見られるのである。最後にも原作『冥報記』にない次の注釈めいた評論が付け加えられている。

然レバ、殺生ノ罪ミ極テ重シ。人、此レヲ聞テ永ク殺生ヲ可止シトナム語り伝ヘタルトヤ¹⁰

このように殺生の罪深きことが強調されているのである。仏教は衆生平等を唱える。すべての命が尊いと考えているのだ。そのため、人間が自分の都合で他の生きものを殺すべきではない。まして罪のない犬を殺すのは、なおさらいけない。そのようなメッセージを読み取ることができるだろう。この説話は単なる怪異譚ではなく、仏教の教えを伝えようとする意図が明らかに窺われるのである。

次は巻九の四十二「河南人婦、依姑令養蚯蚓羹得現報語」をみよ

⁷ 小峯和明校注『今昔物語集』（二）（岩波書店、1999年3月19日）P216

⁸ 注6同掲書 P121

⁹ 注7同掲書 P217

¹⁰ 注7同掲書 P218



う。この説話の内容は次のようである。

隋の大業の時代に、河南のある人の嫁がその姑を憎んでいた。その姑は目が見えない。嫁は蚯蚓を切って羹を作って姑に食べさせた。姑はその味を怪しく思い、ひそかにそのししむらを隠しておいて、息子が来た時に、それを見せた。息子はそれが蚯蚓から作った羹だと知り、妻と別れることにした。そして、妻をそのもとの家に送り返す途中で、雷震とともに妻の姿が急に消える。暫くしてから、天からあるものが落ちてくる。見てみると、身も衣も妻のもとの姿であるが、頭だけは白い犬になっている。言葉も異ならない。そのわけを聞くと、妻は自分が姑不孝をしたため、天神に処罰されたのだと答えた。夫は、そのまま妻を家に連れていき、わけを問う家人に事情を話した。その後、妻は市に出て物乞いをするようになり、ついには行方が分からなくなったという。

この説話は『冥報記』（下）の「河南人婦」をもとに翻案したものである。同話は『法苑珠林』巻 63、『太平広記』巻 162 にも収録されている。その原文は次のようである。

隋大業中，河南人婦，養姑不孝，姑兩目盲，婦切蚯蚓為羹以食；姑怪其味，竊藏一嚮，留以示兒。

兒還見之，欲送婦詣縣，未及，而雷震，失其婦；俄從空落，身衣如故，而易其頭為白狗頭，言語不異。問其故，答云：「以不孝姑，為天神所罰」夫以送官。時乞食於市，後不知所在。¹¹

一見して、かなり短いものであることが分かる。『今昔物語集』の方はかなり手を加えられているのである。まず、人物間のやりとりが「冥報記」よりもこまかく語られている。

姑がその息子にししむらを見せたところの語りには、『冥報記』にはない「此レ、汝ガ妻、我レニ令食メタル物也」¹²という姑の言葉が書き入れられている。又、息子がそれを見た時の一節にも『冥

¹¹ 唐臨著、佐々木憲徳輯、慧淨法師編『冥報記、冥報記輯書』（浄土宗文教基金会 2004 年 7 月）P66。

¹² 注 7 同掲書 P270



報記』にはない「此レ、蚯蚓ヲ糞ニシカル」¹³という心の声が付け加えられている。また、妻のもとの家の家人と夫とのやりとりも語られている。

このような語りが付け加えられることによって、臨場感のある説話に仕立てられているのである。

また、犬になった妻が、夫にわけを聞かれた時の返事は「我レ、姑ノ為ニ不孝ニシテ、蚯蚓ノ糞ヲ令食メタルニ依テ、忽ニ天神ノ罰シ給フ所也」¹⁴となっているが、それに対して『冥報記』の方では単に「以不孝姑、為天神所罰」とあるのみである。ここでは、不孝の具体的内容も説明されているのである。さらに雷震の後、突然妻の姿が消えた時の夫についても「怪シビ思フ程ニ」という心理描写が付け加えられている。成り行きを簡潔に語る『冥報記』にかなりの肉付けが行われているといえることができる。

又、筋が原作と異なるところも見られる。

『冥報記』の方では、妻が姑不孝をしたため、夫は公儀の裁きを求めて県府へ連れていこうとするが、『今昔物語集』の方では、妻と別れることにして、もとの家へ帰そうとする。これは両国の文化、習俗の違いによって生じた違いと思われる。中国の方では、極少数の例を除いて、「よめむかえ」婚である¹⁵。結婚すれば、妻は夫の家へ行って、夫の父母や兄弟と同居し、舅姑を自分の父母と同様に扱わなければならない。そして、中国は儒家思想で国を治めるため、「孝行」を大変重視する。舅姑に不孝を働けば、処罰されることになる。そのゆえに、『冥報記』の方では、夫が妻を県府へ送ろうとしたのである。それに対して、日本の場合、平安朝の文書には姑不孝のため、公儀に処罰されるという例は見当たらない。「よめむか

¹³ 注 7 同掲書 P270

¹⁴ 注 7 同掲書 P271

¹⁵ それに対して、古代日本の方では「妻問い婚」「通い婚」が行われていた。結婚すれば、男性が女性のところに通うことになる。「よめむかえ」婚は平安末期になってからのことで、主に武家の間で行われていた。(池田亀鑑『平安朝の生活と文学』、角川文庫、昭和 39 年 4 月 30 日初版、昭和 46 年 7 月 30 日十一版、P100-102)

え」婚は知っていても、姑への不孝により官から処罰を受けるというのは、読者にとって腑に落ちない展開と考えられたのではなかろうか。そのため、このような変更が行われたと推測できる。

さらに、『今昔物語集』の方では、最後のところに、次のような評論が付け加えられている。

此レヲ以テ思フニ、女、愚痴ニシテ如此クノ悪ヲ造ル事有リ。
現報ヲ得ル事如此シ。設ヒ現罰無シト云フトモ、天神、皆憎ミ
給フ事ト知テ、悪ノ心ヲ止メテ善ヲ可修シトナム語り伝ヘタル
トヤ。¹⁶

姑不孝な妻が現報を受けたと、この説話を解説している。『冥報記』の方では、不孝をすると、人界の法律ばかりでなく、天からも処罰が下ると孝行の重要さを説いたのに対して、『今昔物語集』の方では、むしろ仏教思想の因果応報の恐ろしさを説こうとしているのである。『冥報記』の方では、より儒教思想や道教思想の色彩が強いのに対して、『今昔物語集』の方では仏教思想の色彩が濃く現われている。

次は巻二十六の十一「参河国始犬頭系語」を見よう。この話の筋は次のようである。

昔、三河国の郡の郡司が二人の妻をもっていて、二人にそれぞれ蚕を飼わせていた。ところがどうしたことが、本妻の方の蚕は皆死んでしまった。夫は本妻のところに寄りつかなくなり、従者も行かなくなった。そのため、本妻の家は貧しくなる。ある時、本妻が桑の葉に一匹の蚕を見つけ、大事に大事に育てた。ところが、この蚕が家で飼っていた白い犬に食われてしまう。そのため、犬を打ち殺すわけにはいかない、蚕一匹も飼えないとは、前世の因縁だろうと悲嘆していると、犬がくしゃみをし、鼻の二つの穴から白い糸が二筋出て来る。それを糸杵に巻くが、糸はまだ出て来るので、竹の棹にくり掛けた。しかし、それでもまだ尽きず、桶に巻いた。四、五、千両ほど巻き取った後、糸の末端が出てきて犬は倒れて死んでしま

¹⁶ 注 7 同掲書 P271

う。本妻は犬を仏神の化身だと思い、桑の木の根のもとに犬を埋める。本妻が糸を持て余していると、ちょうど夫が用足しに行くついでに、その門前を通りかかった。入ってみると、本妻のところの糸はこの世にまたとないほど上質のものである。今の妻の飼っている蚕から取れる糸は黒くて粗悪なものだ。本妻から一部始終を聞いた夫は、本妻を捨てたことを後悔し、そのままこの妻のもとにとどまり、新しい妻のところへは行かなくなった。犬を根元に埋めた桑の木からはそれからたくさん繭ができた。それをとって糸にすると、上質の糸ができた。それ以後、犬頭という糸をこの国から天皇に献上することになった。この話は馬頭娘譚、オシラサマの類話と指摘されている¹⁷。

馬頭娘譚は中国の蠶神説話である。この類型の説話には、三国時代の張儼の「太古蠶馬記」、晋干寶『搜神記』の「女化蠶」、唐代『原化伝拾遺』の「蠶女」などがある。このうち、張儼の「太古蠶馬記」は「女化蠶」と表現上の違いが三ヶ所ほどある他、筋は殆ど同じであり、それが明代『五朝小説大観』に収録されている。ただ、『搜神記』では、全く張儼への言及はなく、この説話を引いた唐宋類書も出典を『搜神記』として、張儼のことには全く触れていないため、この話が張儼によるものかどうか判然としない。それゆえ、ここでは、『搜神記』の「女化蠶」を取り上げる。その原文は次のようになっている。

舊説：太古之時，有大人遠征，家無餘人，唯有一女。牡馬一匹，女親養之。窮居幽處，思念其父，乃戲馬曰：「爾能為我迎得父還，吾將嫁汝。」馬既承此言，乃絕韁而去。徑至父所。父見馬，驚喜，因取而乘之。馬望所自來，悲鳴不已。父曰：「此馬無事如此，我家得無有故乎！」亟乘以歸。為畜生有非常之情，故厚加芻養。馬不肯食。每見女出入，輒喜怒奮擊。如此非一。父怪

¹⁷ 阪倉篤義、木田義憲、川端善明校注『今昔物語集 本朝世俗部三』新潮日本古典集成（新潮社 昭和 54 年 8 月 5 日印刷、8 月 10 日発行）P169 之注釈 14
馬淵和夫・国東文磨・今野達校注・訳『今昔物語集』三『日本古典文学全集』（小学館、1974 年 7 月 31 日初版、1989 年 12 月 20 日第十六版）P580

之，密以問女，女具以告父：「必為是故。」父曰：「勿言。恐辱家門。且莫出入。」於是伏弩射殺之。暴皮於庭。父行，女以鄰女于皮所戲，以足蹙之曰：「汝是畜生，而欲取人為婦耶！招此屠剝，如何自苦！」言未及竟，馬皮蹶然而起，卷女以行。鄰女忙怕，不敢救之。走告其父。父還求索，已出失之。後經數日，得於大樹枝間，女及馬皮，盡化為蠶，而績於樹上。其(上爾下蟲)綸理厚大，異于常蠶。鄰婦取而養之。其收數倍。因名其樹曰桑。桑者，喪也。由斯百姓競種之，今世所養是也。言桑蠶者，是古蠶之餘類也。¹⁸（後略）

この話の中で全然母親のことに触れていないことからすると、恐らく母親はすで存在しないと思われる。家が貧しいから使用人もいない。父親と娘が二人だけで暮らしていたのであろう。そのため、父親が遠いところへ出征に駆け出されると、娘が一人ぼっちで寂しかったため、つい飼っていた馬にふざけて「父を連れて帰ってきたら、お前の嫁になる」と言ってしまう。馬はこの約束を信じ、本当に父親を連れて帰る。父親が帰って来た後、馬においしい餌を沢山やるが、馬は食わず、娘を見ると興奮する。そのわけを知った父親は怒って馬を射殺し、庭に馬の皮を晒した。娘は約束を守らなかった上に、馬の皮を蹴って罵った。その時、馬の皮が急に起き上がり、娘を巻いて飛んで行ってしまう。そして、数日後、娘と馬の皮が大樹の上で蚕になっていることが分かる。その蚕が木の上で作った繭は特別大きい。隣家の婦人がそれをとって飼うと、今までのものの何倍もの糸がとれた。

「今世所養是也」とあるように、これが養蚕の縁起譚とされている。またその木は娘が死んだところなので、「喪」の意味で「桑」と命名されたとあるとおり、木名の縁起譚にもなっている。

次は『太平広記』巻四七九の『原化伝拾遺』「蠶女」を見てみよう。

蠶女者，當高辛帝時，蜀地未立君長，無所統攝。其人聚族而居，

¹⁸ 干寶『搜神記』（里仁書局 1982 年 9 月 10 日）P172-173

遞相侵噬。蠶女舊跡，今在廣漢，不知其姓氏。其父為鄰邦掠（「邦掠」原作「所操」，據明抄本改）去，已逾年，唯所乘之馬猶在。女念父隔絕，或廢飲食，其母慰撫之。因告誓於眾曰，有得父還者，以此女嫁之。部下之人，唯聞其誓，無能致父歸者。馬聞其言，驚躍振迅，絕其拘絆而去。數日，父乃乘馬歸。自此馬嘶鳴，不肯飲齧。父問其故，母以誓眾之言白之。父曰：「誓於人，不誓於馬。安有配人而偶非類乎？能脫我於難，功亦大矣。所誓之言，不可行也。」馬愈跑，父怒，射殺之，曝其皮於庭。女行過其側，馬皮蹶然而起，卷女飛去。旬日，皮複棲於桑樹之上。女化為蠶，食桑葉，吐絲成繭，以衣被於人間。父母悔恨，念之不已。忽見蠶女，乘流雲，駕此馬，侍衛數十人，自天而下。謂父母曰：「太上以我孝能致身，心不忘義，授以九宮仙殯之任，長生於天矣，無複憶念也。」乃沖虛而去。今家在什邡綿竹德陽三縣界。每歲祈蠶者，四方雲集，皆獲靈應。宮觀諸化，塑女子之像，披馬皮，謂之馬頭娘，以祈蠶桑焉。稽聖賦曰：「安有女，（《集仙錄》六「安有女」作「爰有女人」。）感彼死馬，化為蠶蟲，衣被天下是也。」¹⁹

この話でも娘が同じく馬の皮に巻かれて蚕になり、大きい繭を作って、上質の糸がとれるようになる。養蚕の縁起譚である。ただ、「娘が父親を連れて帰ってきた者に嫁ぐ」ことを約束したのは、ここでは娘ではなく、母親になっている。そのため、娘は道德上の悪行を行うことはない。親孝行の心をもつ娘は、「太上」に「九宮仙殯」として拔擢され、天上に永住することとなる。「太上」は道教では「太上李老君」のことを略称することばであり、「孝行」は儒教の教えでは基本的な道德だとされている。この蠶神説話には儒教、道教的な思想も織り込まれているのである。

少し話が逸れるが、日本でよく知られている『遠野物語』のオシラサマの説話も見ておきたい。その大筋は次の通りである。昔、あるところに貧しい百姓がいた。妻は無く、美しい娘がいる。又、一頭の馬を飼っていた。娘はこの馬を愛して夫婦になった。これを知

¹⁹ 李昉『太平廣記』（古新書局，1977）。P1018-1019

った父親は、馬を桑の木につり下げて殺してしまう。娘は大変悲しんで死んだ馬の首に縋って泣く。さらに父親が怒って馬の首を切り落とすと、娘はその首に乗って天に昇っていく。オシラサマというのはこの時よりなった神であり、馬をつり下げた桑の枝でその神の像が作られる²⁰。

又「大白神考」にもオシラ神の話が語られている、次のようである。

昔、長者に一人の美しい姫がいた。長者の名馬梅檀栗毛は、その姫を恋い慕い、長者が怒ってその馬を殺すと、姫もまた悲しんで命が絶える。二つの霊は昇天して、次の朝、庭の桑の木に降り、化してトウドコの蟲になった²¹。細部には若干の違いがみられるが、両者の筋はほぼ同じである。日本の蠶神説話とでも言えよう。

では、『今昔物語集』卷二十六の十一話と『搜神記』の「女化蠶」、『原化伝拾遺』の「蠶女」とは、どのような関係にあるのだろうか。まず、『今昔物語集』の方は、人獣婚姻譚の要素は取り除かれているが、次のような類似点が見られる。

- 一、動物（馬や犬）の頭部から糸が出て来る。
- 二、死体とかかわりのある木（桑）に蚕あるいは繭がある。
- 三、木にある蚕の作った繭から上質の糸が大量に取れる。

これらのことは馬頭娘類型につながる説話であることを示している。

参河郡司のもとの妻は犬頭糸がとれることによって夫との仲がもとにもどり、幸福と富を得た。その子孫もこれを受け継ぎ、その糸を続けて天皇に献上したため、一族はずっと富裕に暮せる。ここ

²⁰ 柳田国男「遠野物語」『柳田国男集』第四卷（筑摩書房、昭和44年5月20日）P31

²¹ 柳田国男「大白神考」『柳田国男集』第十二卷（筑摩書房、昭和44年5月20日）



での犬は飼い主に幸福と富をもたらすものなのだ。

しかし、この説話には、仏教思想が取り入れられていることも看過できない。まず犬が四、五千両ほどの上質の糸を出してくれたことに対して、もとの妻は感謝感激の気持ちで「此ハ仏神ハ犬ニ成テ助ケ給フ也ケリ」²²という。日頃信心深いもとの妻に対する仏神の助けだと物語られているのである。又、最後に「此ヲ思フニ、前生ノ報ニ依コソハ、夫妻ノ間モ返合ヒ、糸モ出来ケン、ト語り伝ヘタルトヤ」²³という評論も付けられている。夫婦の仲がもとにもどり、糸が出て来たのはすべて「前世ノ報」だと説明されているのである。この話によって仏教思想の因果応報を人々に浸透させようとする意図は明らかだろう。馬頭娘説話の類型の一つには違いないが、この説明にはまた仏教思想が色濃く落とされているといわなければならない。

次は巻二十九の三十二「陸奥国狗山狗咋殺大蛇語」を取り上げたい。大筋は次のようである。

昔、陸奥の国にある身分の卑しい男がいた。その男は多くの犬を飼っていて、いつもその犬達を連れて、深い山に入り、狩猟をしていた。ある日、彼はいつものように犬達をつれて山に入り、山の中で夜を明かすことになった。夜、彼は一本の大木の空洞の中に入り、そばに弓、胡籥、大刀などを置いて、前に火を焚いていた。犬達をみなその周りで寝ていた。夜中、犬達の中で、とりわけすぐれて賢い犬が起き上がって、木の空洞の中で寝ている主人の方に向かってけたたましく吠え立てた。主人は周りを見回ったが、別に異常もない。だが、犬はなお吠え立てたため、主人は周りを見回ったが、別に異常もなかった。それでも、犬はなお吠えやまず、しまいには主人に向かって飛び掛ろうとする。主人は犬が自分を食い殺そうしていると思い、大刀を抜いて脅したが、犬はどうしても吠えやまない。

²² 馬淵和夫・国東文磨・今野達校注・訳『今昔物語集』三『日本古典文学全集』（小学館、1974年7月31日初版、1989年12月20日第十六版）P581

²³ 注22同掲書 P583

主人は噛み付かれたら、かなわないと思って、木の空洞から外に飛び出した。そのとたん、犬は木の空洞の上を目がけて飛びかかり、何かに食いついた。それは長さ二丈余りの大蛇であった。主人はそこでようやく犬の意図を理解して、すぐ大刀で蛇を切り殺した。この犬がいなかったら、自分は殺されたであろう。主人はこの犬は自分にとってこの世に二つとない宝だと思って、犬を連れて家に帰って行った。

これは忠犬譚類型の説話である。中国の『搜神記』「華隆家犬」の話との類似が指摘されている²⁴。「華隆家犬」の話は次のようである。

太興中，吳民華隆，養一快犬，號「的尾」，常將自隨。隆後至江邊伐荻，為大蛇盤繞，犬奮咋蛇，蛇死。隆僵仆無知，犬彷徨涕泣，走還舟，復返草中。徒伴怪之，隨往，見隆悶絕。將歸家。

犬為不食。比隆復蘇，始食。隆愈愛惜，同于親戚。²⁵

日本語に直すとおおよそ次のようになる。忠犬「的尾」を連れて河のそばへ荻を切りに行った主人が、蛇に巻き付かれる。しかし、的尾が懸命に蛇に噛み付いたため、ようやく蛇は死に、主人は助かった。主人が意識を取り戻すまで、的尾は何も食べなかった。

これは、『太平広記』に収められている『幽明録』の「華隆」と同話と考えられるが、ただ、『搜神記』の方では時代が「太興中」とあるのに対して、『幽明録』の方では、「晋泰興二年」としている。又『幽明録』の方では、華隆という人物について、さらに『搜神記』にない「好戈獵」ということばが付け加えられている。川へ行く目的地は『搜神記』の方では『伐荻』とあるのに対して『幽明録』の方では「至江邊」とあるだけで、目的については何も語られていない。また、犬の様子をおかしく思って、華隆を助けに来たのは『搜神記』では華隆の「徒伴」(朋輩)とあるのに対して、『幽明録』の

²⁴馬淵和夫ら校注、訳『今昔物語集』（四）古典文学全集（小学館、1976年7月31日初版、1978年8月20日第十五版）P432

²⁵注18同掲書P241



方では「家人」とある。とはいえ、二つの筋はほぼ同じである。

この二つ以外にも、『搜神後記』、『集異記』、『宣室志』、『廣異記』、『擴異記』、『源化記』など、六朝や唐代の古代小説にも忠犬譚の説話が多く収録されている。又、『太平広記』の卷四三七畜獸四犬（上）には犬の説話が二十話収録されており、中に忠犬譚（日頃餌をやる人を飼い主に含めた場合）は十四ある。飼い主を守るために、命を落とした犬もいる。但し、『搜神記』にある「華隆家犬」はこの類型の説話の早い例であるし、犬が戦った相手が同じ蛇であるという点、飼い主も犬も命を落としていない点を考え合わせれば、「陸奥国狗山狗咋殺大蛇語」が生成される際、日本に伝わった『搜神記』の「華隆家犬」が参考にされた可能性が大きいと考えられる。しかし、類似するところもあれば、異なっているところもある。以下に相違点を整理してみよう。

一、舞台背景：『搜神記』の方では、川のそばで起きたことになっているのに対して『今昔物語集』の方では、山の中で起きたことになっている。

二、犬の忠義ぶり：『搜神記』の方では、主人が蛇に巻き付かれた時に、犬が懸命に蛇を噛み殺して、主人を助ける。そして、主人が意識を失ったのを見て、泣きながら舟と草叢の間を彷徨う。そのおかげで朋輩達がおかしく思って、主人を助けに来るのである。又、主人が意識を取り戻すまで、忠犬は何も食べない。それに対して『今昔物語集』の方では、犬が主人の休んでいる木の空洞に大蛇が棲んでいることに気づいて、その大蛇がまだ主人に危害を加える前に、けたたましく吠えたて、大蛇を威嚇している。そして主人が木の空洞を出るや否や、すぐ大蛇に噛み付く。又、『搜神記』の方では、主人が危険に遭った時、犬が懸命に助けたのに対して、『今昔物語集』の方では、危険を未然に防ごうとして、犬は木の空洞に向かって飛び掛かりながら吠えやまず、事情を知らない主人に誤解されて、殺されそうになるが、このように主人のためを思っている犬の行動が

かえって主人に誤解される例は『太平広記』にも見られる。『太平広記』卷四八七の『擴異記』「劉巨麟」がそれである。劉巨麟は唐開元の時代の都督で、よく夜に、朝廷の使者を接待していた。ある夜、又使者を迎えようとするが、彼の飼い犬はどうしても出掛けさせようとしなない。劉巨麟は自分には従者が沢山ついているから、危険の目に遭う筈がないと思い、犬のことを怒って、閉じ込めさせる。それにもかかわらず、彼が馬に乗った際、犬が飛び出して来て、ある従者の咽元に噛み付いて、殺してしまう。従者の懷を調べると刃物が見付かった。その従者は日頃、劉巨麟に叱責されていたため、恨みに思い、劉巨麟を暗殺しようとして企んでいた。犬がそれに気付いて、主人を危険から守ったのである。又、同じ『太平広記』卷四三七の『集異記』「鄭韶」も同じモチーフをもった説話である。隋の煬帝の時代に鄭韶という人がいた。ある時、彼は煬帝の使者を迎えようとした時、飼い犬がどうしても出掛けさせようとしなない。そのため、しまいには、鄭韶が怒り出して、犬を柱に縛らせたが、犬はその縄を引っ張って切り、従者の薛元周を噛み殺す。元周の懷を調べると、刃物を見付かった。鄭韶も忠犬のおかげで、死を免れたのである。このように、犬が主人の身に危険が迫っていることに気が付き、懸命に主人を守ろうとするが、かえって主人に誤解される類型の説話は古代から中国には見られる。「陸奥国狗山狗咋殺大蛇語」にはそのような中国の話型も流れ込んでいる可能性が高い。とはいえ、主人を守りたい一心で、我が身をも顧みない『今昔物語集』の犬は、その忠義ぶりが「華隆家犬」よりもさらに強調されているといえることができるだろう。

三、人物の心理のより詳しい描写：例えば、犬が木の空洞に向かって飛び掛りながら、吠えたのを見た時の主人の内心が、次のように語られている。

此ノ狗ノ可吠キ物モ不見エヌニ、我レニ向テ此ク踊懸リテ吠ユルハ、獸ハ主不知ヌ者ナレバ、我レヲ、定メテ此ル人モ無キ山

中ニテ咋テムト思フナメリ。此奴切殺シテバヤ²⁶

又、木の空洞から飛び出そうとする時にも「此ル狭キ空ニテ此ノ奴咋付ナバ悪カリナム」²⁷と心の中が語られている。即ち、木の空洞から出たのは、蛇がいることに気づいたのではなく、空洞のスペースが狭いから、犬と闘ったら、勝てないし、噛まれたら対応しにくいと思ったからであった。そして、犬が飛び掛かりながら吠え付いたのは自分を大蛇から守りたいためだと知った主人の内面が「殺シタラマシカバ何許悔シカラマシ」²⁸と語られ、さらに翌日、大蛇の長さ、太さを目にした時の驚きが「寝入タラム程ニ、此ノ蛇ノ下テ巻付ナムニハ、何態ヲカセマシ。此狗ハ、極カリケル、我ガ為ノ此ノ不世ヌ財ニコソ有ケレ」²⁹と記され、あらためて犬の行動のすばらしさ、ありがたさが強調されている。このように作中人物の心の声が挿入されることによって、ストーリーが厚みを増し、展開に緊張感が生まれているのである。

四、末尾の注釈めいた評論：『今昔物語集』には末尾に次のような評言が付されている。

此レヲ思フニ、実ニ狗ヲ殺タラマシカバ、狗モ死テ主モ其ノ後蛇ニ被吞マシ。然レバ然様ナラム事ヲバ吉々ク思ヒ静テ、何ナラム事ヲモ可為キ也。此ル希有ノ事ナム有ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。³⁰

もし、主人が早とちりして、犬を殺してしまったら、自分も大蛇に吞まれてしまっただろう。語り手は、この事実を踏まえて、もし、日頃自分に忠義を尽くしてくれた犬に、急に変わった動きがあったら、冷静に考えてから対応を取るべきだと人々に訓戒を垂れている。

²⁶ 馬淵和夫ら校注、訳『今昔物語集』（四）古典文学全集（小学館、1976年7月31日初版、

1978年8月20日第十五版）P433

²⁷ 注26同掲書P433

²⁸ 注26同掲書P434

²⁹ 注26同掲書P434

³⁰ 注26同掲書P434-435



単なる奇譚では終わらせず、教訓的な意味を与えようとしているのである。

次は卷三十一の十五「北山狗人為妻語」を見よう。その大筋は次のようである。

昔、京にある男がいた。その男は北山へ遊びに行ったが、道に迷って途方に暮れる。その時、ある柴の庵を見付けた。庵の内から二十余りの若い美しい女が出来てきた。男は一夜泊めてもらうように頼んだ。女は最初、夫に情夫だと疑われるかもしれないからと断るが、帰ろうにも帰るすべのない男が、再三、頼んだ結果、女は「自分の兄」ということにして男を泊めることにする。そのかわり、そのことを決して口外にするなと男に言い含めた。その女の夫というのは実は大きな恐ろしい白い犬であったが、女の取りなしで、一夜無事に過ごすことが出来た。ところが、男は女との約束をやぶり、皆にこのことを言ってしまう、若者達が山の中に入って、その犬を射殺そうとする。だが、矢は当たらず、犬は女を連れて山奥に消えていった。男は二、三日後に死んでしまったという。

これは人犬結婚譚類型の説話であり、その先行説話は中国の『瀟湘録』や『搜神記』に見られる。

『搜神記』卷十四の「盤瓠」がそれであり、その大筋は次のようである。

高辛氏（帝嚳）の時代、戎呉は強盛だったので、度々辺境を侵して来た。なかなかその大將を捕らえて、戎呉の軍隊を破ることができない。そのため、王は戎呉軍の大將の首を取って来るものがあれば、黄金千金、万戸の領地を与えた上、娘を賜るといって英雄を募った。その結果、盤瓠という五色の犬が戎呉の大將の首を銜えて来たため、しかたなく王は娘を嫁がせた。王女は盤瓠と一緒に山の中に入って岩屋の中に住み、三年後、六人の男子と六人の女子を生んだ。盤瓠が死んだ後、六人の男子は六人の女子と結婚して夫婦になった。

これは人と犬が結婚する説話の早い例である。江戸時代の曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』にも影響を与えたとされている。

中国にあるもう一つの例は『太平広記』巻四三八畜獸五犬（下）に収められている唐の李隱の『瀟湘錄』の「杜修己」である。梗概を記すと次のようになる。

越人杜修己は一匹の白い犬を飼っていた。修己は大変白い犬を可愛がり、いつも珍膳を与えた。ある日、修己が出掛けた後、白い犬はその妻薛氏に噛み付くと脅かし、私通しようとする。修己はそれを知って、白い犬を殺そうとしたが、逃げられてしまい、妻とも別れることにした。妻は実家の薛家に帰ったが、半年後、白い犬は突然、薛家に訪れ、彼女を銜えて行く。そして、一年後、薛氏との間に一子をもうけた。その子は外形は人間に似ているが、体中白い毛が生えている。白い犬が死んだ後、薛氏はその子を連れて、山を下り、やがて薛家で厄介になった。その子は外形が醜く、性格も凶悪である。出掛けてはしばしば強盗を働いた。そのため、薛家はその子を殺そうとする。母の薛氏はそれを知って強盗をやめるように戒め、彼の出生の秘密を明した。それを聞いた白い犬の子は薛家を出て行ったが、三年後戻って来て、母以外の薛家の人達を全部殺してしまう。そして、屋敷に火を放ち、母を連れ去った。

『瀟湘錄』のこの説話も人犬結婚譚ではあるが、登場する白い犬は主人に珍膳を食べさせてもらうほど可愛がられていたにもかかわらず、恩を仇で返す。主人の留守の間に、その妻を脅かして、私通しようとするのである。野獣の本性が現われたとでも言えようか。白い犬の子も、自分が盗賊になって人を殺すのは、「犬」の「氣」を受け、「人の心」がないからだと考え、ついには自分が世話を受けた外祖父の一家を皆殺しにしてしまう。

ここで語られている白い犬は、日本の白い犬と全く違う性質が与えられている。日本の白い色の動物は古来、靈妙な力を持つと考え

られている³¹が、ここではむしろ不忠不義、邪悪な畜生として語られているのだ。又、犬の妻になった薛氏も「淫逸」を好む女性として語られ、白い犬の子まで根からの悪者とされている。「杜修己」の中の犬は、その性質において、「盤瓠」の犬、『今昔物語集』卷三十一の十五の犬と明らかに異なっている。まず、「盤瓠」の方を振り返ってみよう。

「盤瓠」に登場する犬は出生の仕方から普通の犬と異なっている。人間の耳の中から「頂虫」として誕生した後、犬に化したのだ。毛の色も普通の犬には見られない五色である。そして、それまで人間にはできなかった戎呉の大將の首をとってくるという仕事を簡単に成し遂げた。外形は犬であるが、神を思わせるような存在として語られている。又、娘が盤瓠に嫁いだ後、王は悲しく恋しく思うので、使者をして見に行かせたが、「天輒風雨，嶺震雲晦」のため、その住处まで辿り着くことができない。盤瓠の同意を得なければ、その家を訪問できないわけである。これもまた神に近い存在としての盤瓠を印象付けている。

一方、犬と結婚した娘は、王の子供でありながら、人間と犬は結婚してはいけないという官吏達の諫言に耳を貸さず、約束した以上、王が守らなければ、国に禍を齎すといって、皆の反対を押し切り、盤瓠のもとに行く。この娘の振る舞いは、先に触れた『搜神記』卷十四の「女化蠶」の話を想起させる。「女化蠶」では、馬との約束を守らなかったため、娘が馬の皮に巻かれて、桑の木の上で蚕になってしまう。「女化蠶」の娘やその父親と比べると、「盤瓠」の王女の立派さが際立つ。こうしてみると、「盤瓠」には、神仙譚的な能力や高潔さが盛り込まれているといえるかもしれない。

このような神仙譚的な趣向は、『今昔物語集』卷三十一の十五の話にも取り入れられている。この話では、犬の妻に世話になった男が山を下りた後、犬が人を妻にしていることを言いふらしてしまう。そのため、皆で弓矢や刀剣を携えて犬を殺しに行く事態となる。

³¹ 注 26 同掲書 P586

が、犬は前の男の顔を見たたん、女を前に押し立て、山奥の方に逃げていく。大勢で取り囲んで矢を射掛けるが、少しも当たらない。男たちは「此ハ只者ニモ非ヌモノ也ケリ」³²といって引き返し、約束を守らなかった男は二、三日して死んでしまう。つまり、男にはいわゆる罰が当たったのであり、そのことは次に続く「彼ノ狗ハ神ナドニテ有ケルナメリ」³³という物知りの古老の言葉から明らかである。「北山狗人為妻語」に見られる、犬を神格化する傾向、それに、約束の履行・不履行というモチーフはおそらく、「盤瓠」から影響を受けたと思われる。とはいえ、両者の間には次のような異なる点も見られる。

一、人と犬が結婚する事情：「盤瓠」の方では、王の娘が王の約束を守るため、犬と結婚したとあるが、それに対して『今昔物語集』の方では、ある日思いがけず、「奇異キ物ニ被取レ」³⁴て、その妻にされたと女が語っている。つまり、さらわれて来たのである。

二、人と犬との結婚後の生活：「盤瓠」の方では、特にその結婚後の生活については語られていないが、六人の男子と六人の女子が生まれたことからすると、夫婦生活はつつがなかったものと思われる。盤瓠も「蠻夷」一族の祖先になっている。それに対して『今昔物語集』では、夫婦に子供はない。だが、犬は「入テ竈リ前ニ臥セリ」、女は「苧ト云フ物ヲ績テ、狗ノ傍ニ居タリ」³⁵ということから分かるように、犬はその家の家長としてその妻と仲睦じく暮らしているようである。そして、「乏シキ事ハ不侍也」³⁶とあることから、人間の妻に不自由な暮らしをさせていないこともわかる。

三、約束の履行・不履行：『搜神記』の方では、王女が約束をしっかりと守ったとあるだけで、そのことについてのコメントは別にみら

³² 注 26 同掲書 P588

³³ 注 26 同掲書 P589

³⁴ 注 26 同掲書 P586

³⁵ 注 26 同掲書 P587

³⁶ 注 26 同掲書 P586



れない。それに対して『今昔物語集』の場合、最後に「糸益無キ事云タル男也カシ。然バ信無力ラム者ハ心カラ命ヲ亡テボス也ケリ」³⁷という語りがあある。男は約束を守らなかったため、命を落としたわけである。『搜神記』では、たとえ相手が犬であっても、しっかり約束を守る王女のこと話が語られているのに対して、『今昔物語集』の方では約束を守らなかった男の最期を描くことによって、読者への教訓が示されている。『今昔物語集』は犬説話においても、中国の説話を取り込みつつ、独自にそれを編み直しているといつてよかろう。

三、結び

以上の考察を通して、『今昔物語集』巻九の二十二「兗州都督遂安公、免死犬責語」と四十二「河南人婦、依姑令養蚯蚓羹得現報語」はそれぞれ、『冥報記輯書』の「唐李壽」と『冥報記』の「河南人婦」からの翻案説話であり、巻二十六の十一「参河国始犬頭系語」は『搜神記』の「女化蠶」の馬頭娘説話のモチーフを、巻二十九の三十二「陸奥国狗山狗咋殺大蛇語」は『搜神記』「華隆家犬」の忠犬譚説話のモチーフを、そして、巻三十一の十五「北山狗人為妻語」は『搜神記』「盤瓠」の人犬結婚譚のモチーフを取り入れたことが明らかになったが、『今昔物語集』には、次のような相違点も見られる。

一、読者がより分かりやすく読めるように、本来断片的な中国怪異譚に心理描写を加えたり、説明めいた言葉を書き入れたりして、もっとまとまりのあるストーリーに書き換えている。

二、日本の風俗習慣に合わせるため、筋を変更したところも見られる。

三、読者の興味を引くために、いろいろ手を入れて原作より紆余曲折のある展開にしている。

四、中国の方では、儒教、道教の色彩をより色濃く帯びているのに

³⁷ 注 26 同掲書 P589



対して、日本の方では仏教思想の影が色濃く落とされている。

五、奇なる話や珍しい話を語り伝えるだけでなく、必ず最後の評論として教訓の言葉を付け加え、人々を教え諭そうとしている。

『今昔物語集』の犬説話は、その生成において、中国の説話が翻案されたり、各種のモチーフが取り入れられたりしているが、日本の読者がより面白く、かつ、分かりやすく読めるように、日本の文化に合わせて筋を変えたり、加筆したりして、原作の中国の説話と異なる趣の説話が作り上げられているのである。

参考文献

小島憲之、木下正俊、佐竹昭広校注・訳（1990）『万葉集（三）』小学館

小峯和明校注（1993）『今昔物語集（二）』岩波書店

阪倉篤義、木田義憲、川端善明校注（1979）『今昔物語集 本朝世俗部二』新潮社

唐臨著、佐々木憲徳輯、慧浄法師編（2004）『冥報記、冥報記輯書』浄土宗文教基金会

萩原浅男、江島巢隼雄（1990）『古事記 上代歌謡』小学館

馬淵和夫ら校注（1978）『古典文学全集（四）今昔物語集』小学館

馬淵和夫・国東文磨・今野達校注・訳（1974）『日本古典文学全集三 今昔物語集』小学館

柳田国男（1969）「遠野物語」『柳田国男集 第四卷』筑摩書房

千寶（1982）『搜神記』里仁書局

李昉（1977）『太平廣記』古新書局

漢鄭玄『周禮』卷九，四部叢刊明翻宋岳式本，中國古籍書庫



臺灣大學學術
期刊資料庫